

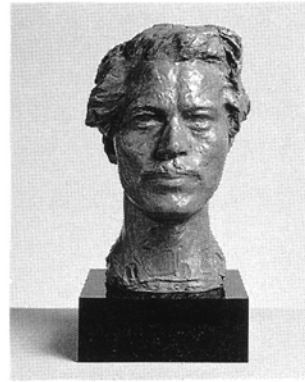
⑮

画家・彫刻家

保田龍門

ちようこくか

やすだりゆうもん



保田龍門像

和歌山県庁の正面玄関の階段を二階に上がると、その正面の壁に、和歌山県にまつわる神話「丹生津姫」と「高倉下命」の彫刻がある。いずれも保田龍門氏が制作したものである。

紀ノ川に沿ってさかのぼると、紀州富士と呼ばれる緑豊かな美しい山、龍門山がある。そのふもとの龍門村（現在の紀の川市）の農家の末っ子として、明治二十四年に生まれた。子どものときから勉強が良くでき、旧制県立粉河中学校の入学試験もたいへん良い成績で合格した。当時は、いくら勉強ができて、また、進学したくても中学校へいかせてもらえない時代であったから、勉強できることを龍門は喜び、両親に感謝し、一生懸命勉強した。中学校では、絵を描くことに興味を覚えて、スケッチをしたり、水彩画を覚えて、彼が育った美しい山河を描き続けた。



龍門山

中学校卒業が近づくとつれ、龍門の心の中に「中学校で
終わりたいくない。さらに上の学校へ行って勉強をした
い。」という願望が大きくなっていった。しかし、龍門は、
家以上の学校にいくだけの財力がないことを、十分知って
いた。彼の気持ちを分かっている両親は、「お金さえあれ
ばなあ……」と、悩むだけであった。

そんなおり、縁があつて、遠く四国の医者から、「うちの
子にして、医者として育てたい。」という申し出があつた。
龍門は本当は絵の勉強をしたかったが、「上の学校で勉強
させてもらえるなら……」と四国へ行くことを承知した。
そして、旧制高校の理科を受験するため勉強を続けたが、
医学に興味があるわけでもなく、残念ながら受験に失敗し
た。養父は旧制高校から大学へ進む途より、旧制医専を受
験して医者になる早途を進めたが、そのとき、龍門に疑問
が生まれてきていた。

「私は、本当に医者になりたいのだろうか。本当に……。本当に……。」

いろいろと悩んだ龍門は、彼の生まれ育った龍門村へ帰った。そして、両親に「私は、やはり絵の勉強をしたい。」と、打ち明けた。龍門のように中学校を良い成績で卒業していれば、社会に出て仕事をしても成功するのに、世間で認められるかどうか分からない画家の途に進むなどということとは、だれからも敬遠けいえんされた。しかし、世間はそうであつても、何とかして彼の希望をかなえてやりたいと、両親は四方八方手をつくして学資の出どころを考えてくれた。学資を援助してくれる人があり、龍門は、もう一度勉強をして、東京の美術学校を受験することを決意した。四国の養父には、自分の勝手をわびた。

決意すると龍門は、粉河小学校で代用教員をしながら、受験のための勉強をした。そして、もらった給料から四国の養父に学資を返済へんさいし、残った給料は東京での学資として蓄たくわえることにした。

明治四十四年四月、努力が実つて、龍門は旧制東京美術学校（現在東京芸術大学美術学部）西洋画科へ入学することができた。龍門二十歳であつた。

入学した龍門は、油絵を学ぶと同時に彫刻についても勉強を始めた。しかし、

東京での生活は想像以上に苦しかった。学資に困ったのである。アメリカへ移民として渡っていた兄からの送金、自分たちの生活を切りつめて時々送ってくれる両親からの送金、その金が兄や両親の汗の結晶であると思うと、それ以上望むことはできなかつた。

学資を勉強のために使うには、生活費を切りつめるしか方法はなかつた。

龍門は、靈梅院れいばいいんという寺の住職に頼みこんでトタンばりの三畳ほどの物置を無料で借りることができた。たった一枚の木綿もめんの服を年中着とおし、銭湯へは、一月も二月も行かなかつたので、体はまっ黒にすすけて、「靈梅院の狐」と呼ばれたりもした。しかし龍門は平気であつた。

そのようなとき、突然、ヨーロッパで第一次世界大戦がおこつた。大戦の影響で米代が二倍、三倍と値上がりした。それよりも、何より龍門を嘆かせたのは、ヨーロッパからの輸入がとだえ、絵の具が何倍にも暴騰ぼうとう（急激な値上がりのこと）したことであつた。

「ああ…何ということか。それでなくても不自由がちであつた絵の具だつたのに、これでまったく絵の具を手に入れることができなくなつてしまつた。ど



「母と子」(部分)

うして自分たちだけが恵まれないのだろう。」

しかし、龍門は希望を捨てなかった。「自分は色彩しきさいより形態けいたいを勉強するのに向いているかもしれない。そうだ、粘土ねんどがある。」龍門は彫刻科のアトリエに入りし、彫刻の研究にも没頭ぼつとうし始めた。その後の生活は、決して楽ではなく、いくども挫折しかけたが、両親や兄妹、そして友人の励ましを受け、勉強を続け、大正七年、優秀な成績で東京美術学校を卒業することができた。

卒業制作に、「老婦」と「母と子」の二点を提出し、「老婦」は東京美術学校資料館買上げとなり、「母と子」はその年の文部省美術展覧会に初入選し、いきなり特選となり、翌年には、日本美術院展に彫刻を出品、樗牛賞ちぎゅうしょうを受けるなど、中央美術界で認められるところとなった。

龍門は、その後、奨学金しょうがくきんを得て欧米に学び、帰国後は中央で制作発表を続けたが、ある時期から郷里にアトリエを持つようになり、関西、とりわけ和歌山を主な活動の場とした。そのため、龍門の主要な作品の多くは、今日和歌山県内に残されている。